
サカモト症候群

安部 楡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サカモト症候群

【Nコード】

N1530P

【作者名】

安部 楡

【あらすじ】

「またサカモト症候群か……」
忌々しげに呟く老人。

「またサカモト症候群か……」

忌々しげに呟く老人。

土方は諫めるように、もしかしたら敵意さえを込めてデスクの方を見やった。

「お言葉ですが、そのような俗称は」

「ふん、これ以上明確な言葉は無かるう。引退間近のウィッチが特攻をしたがるなんて、ヤツそのものじゃないか」

統合軍極東方面司令部のある一室、薄暗い部屋の中に軍服の老人のしわがれた声が響いた。

「ウィッチは貴重資源なんだ。それをなんだあいつ等は、まるでわがままな子供じゃないか。これも全部坂本が悪い。戦争にくだらなはいヒロイズムを持ち込みやがった。一体これまでにあいつに感化された魔女の何人が特攻を繰り返したか」

土方は何も言い返せなかった。事実、その老人の言葉は客観的に見れば正しいこと。

けれど、土方という男個人からすると、それはあまりにも非人間的なコトに思えた。幼い頃から、国によっては半ば監禁するようにして魔女達を軍属させる行為。結果として彼女たちはそこで空を飛ぶというコトに己を見いだした。軍があるからこそ空を飛べたとか、空を飛ぶために軍に入ったとか、こういった前後関係はあくまで過程。結果として、ウィッチは空に執着することに帰着する。

それをこいつ等は、と土方は拳を握る。
良いように宛がって、良いように扱って、良いように奪い取っていいだけじゃないか。あんたら老人共に坂本少佐の何が分かるって言うんだ。

歯を食いしばる土方の方を見ようともしない老人は、机上の紙の束を手に取り、二三枚めくってまた口を開いた。

「それで、ヤツはもう向かったのかね」

「……ええ、偶然にもここから現場には近いですから」

「ふん、今回の相手は、ジェットストライカーらしいじゃないか。説得するまでもなく振り切られたりしてな」

老人の口元の皺がさらに増す。

例え何をしようと、あなた達は他人をいびるためだけに、その失敗を望んでいる。結局坂本少佐をバカにしたいだけじゃないですか、と土方は眉をひそめた。

でも、今回はそうはいかない。

「大丈夫です。説得には応じて貰えるはずですから」

「大した虚勢じゃないか。その根拠はなんだね」

突然語気を強めた土方を訝しむように、老人は眼鏡をかけ直して正面を向いた。

土方は、それ以上ないしたり顔で口を開く。

「ウィッチに不可能は、ありませんから」

晴れ渡った太平洋。一日で最も青い空を背景に、一人のウィッチが飛んでいる。

向かう方向には赤黒い螺旋、もといネウロイの巣。瘴気渦巻く黒雲のすぐ側で、極細の影がうごめいている。いや、あまりの巨大さに遠近感が狂うのだけど、その粒とはれつきとした一ネウロイ。つまり普段相手にしている大型ネウロイの数千立方の大きさが、その巣にはあった。

ゴーグルを付けたウィッチは、少しだけ顎を引いた。けれどすぐに口角を持ち上げて大きく笑う。

「良いじゃないか、最後にはふさわしいね」

エーテル流をいっそう吹かし、その魔女が加速しようとした瞬間。「止めるシャーリー、特攻など愚かだ……と私が言っても説得力がないか」

「さ、坂本少佐あ」

シャーリーと呼ばれた航空ウィッチは、思わず減速する。

慌てて眼下を見ると、真っ青な海面に軍艦が残した白いスクリュ
ーの跡が一本走っている。

「もつとも、世間じゃあサカモト症候群なんぞ言われているらしい
がな」

腕を組んだ、妙に言葉に力のある扶桑の侍。今となつては髪を下
ろして見た目だけならすっかり女らしくなつてしまった白い軍服の
女性は、それでもシャーリーの記憶と寸分も違わない堂々とした雰
囲気を纏っていた。

「少佐、あんた飛べたんだ」

「……三年だ」

「へ？」

思ったそのままに口に出たシャーロットの疑問に、坂本は少しだ
けためらつて答えた。

「三年かけて、約1時間。無論怪我も病気も、激しい運動も節制し
てようやく貯まった。けれど、ただでさえ微量な一日当たりを作り
出す魔力も、可能な蓄積量も、日に日に衰えていつている。多分一
生の内にあと一回でも飛べたら上出来なくらいだろう」

諦観したような、寂しそうな表情で坂本は首を振った。

「へえ、悪いねえ。私のために費やさせちゃつて。……つと、少佐、
悪いけど話は飛びながらで良いか？ このジェットストライカーっ
てやつはあんまり低速だとバランス崩しちゃうんだ」

「ふむ、どつちに飛ぶのだ？」

「もちろん、あつち」

シャーロットは歯を見せ笑いながら、ネウロイの巣の方を指さし
た。

「あたしはさあ、結構冷たいヤツなんだ。リベリアだからね、妙
なところで合理主義なのさ」

坂本の位置からはシャーリーの顔は見れない。依然として危険な

道へと突き進む彼女を、後ろから追いつがるように後続している。

「少佐が飛べなくなつたあの日、そりゃあもちろんあんたは凄いヤツだとは思つたよ。……でも、心のどこかでは疑問に思つていた。あんたがすつぱりと飛ぶことを諦めていれば宮藤は魔力を失わなかつたんじゃないかつてね」

「それがお前が言う冷たさか？ 事実悪いのは私だ。私が宮藤の魔力を失わせた。それは重く受け止めているつもりだが」

「ははっ、そうかい。まあ、なんにせよあの時私は少佐が何を思つていたのかさつぱりだつたんだよ」

ネウロイの巢はどんどん近づいてくる。けれど坂本は焦つてなにかいながつた。彼女は信じていたから。

「あたし、今年で20なんだ」

ポツリとシャーロットが零した。

「なんか魔力が衰えて来ちゃつて。もしかしたら食生活が悪かつたのかなあもつと魚を食べれば良かったかなあ、なんてね。まあそれでもなんとかジェットストライカーが配備されるまで何とか飛び続けられたよ」

そこまで言つて、シャーロットは急に振り返つた。彼女の顔は、いつの間にか青ざめていた。

「なあ、少佐。飛べなくなることがこんなにイヤだとは、違う、怖いとは思わなかつたよ。あんたの気持ちがよく分かつた。軍歴の短いあたしでさえこうなんだ、少佐はなおさらなんだろうな」

シャーロットはゴーグルをぞんざいに外す。

「あたしは別に特攻するつもりじゃあなかつたんだ。ただ飛べなくなるのがイヤだから、多少の無茶は仕方がないと無茶してみたかつただけなんだ」

彼女は体勢を反転させた。

「なんなんだろうな、この恐怖の感覚は。足を切除すると医者に言われたような感覚か？ それとも眼球を摘出？ ……それとも、死の宣告？」

シャーリーはもはや慣性だけで飛び続けた。そしてじつと坂本の顔を覗き込む彼女の碧眼には、憂いで満ちていた。

次第に二人は減速し、緩やかに降下していった。その様子を見た例の軍艦が、梶を切ってこちらに向かってきている。

「大丈夫だ、シャーリー。お前の気持ちはよく分かる」

シャーロットの顔を包むように、坂本は腕を回す。

「怖がらなくて良い、いや、怖がっても良い。大切なのは、道を間違えないことだ。恐怖とは道を間違えないためにあるんだ。それが原因で道を間違えるなんておかしな話だろ？」

「……」

「さっきお前が言っていたが、多分この恐怖は卒業の悲しさなんじゃないかな」

「……卒業？」

「ああ。二度と戻れないもの悲しさと過ぎ去っていく時の恐怖。時間は二度と戻らない。時間はただ死へと向かって流れていく。それを端的に感じたただけなんだ」

「あたしは、スクールもろくに行かなかったんだ」

「おおよそのウィッチがそうさ。私だつてそうだ。けれど、形は多少違えど、世間一般の人間は皆卒業を繰り返して大人になったんだ。ウィッチにその恐怖を乗り越えることが出来ないとも思つか」

「でも、それつて乗り越えたつて言えるの？ 恐怖を無視しているだけじゃない」

「そうだな。確かにつまらない大人になると言うことも知れないでもだシャーリー、お前にはあの時の私のようになつて欲しくないんだ」

二人の間には、しばらく沈黙が流れる。けれど気まずいわけでなく、むしろ聞こえてきた遠い波の音が耳に心地よかつた。

しばらくして、シャーロットがふと思いついたように顔を上げた。「なあ少佐。ところであたしは着艦なんて器用な真似はできないぞ」

「心配するな、私もだ」

「……何も解決してない」

「大丈夫だ。私のは水上偵察ユニットだからな、片方を貸してやる。それで浮かべばいい」

「いやいやいや、あたしのユニットが水浸しになるじゃん、それじゃあ。一応試験機だから壊したらかなり怒られるんすけど。それにこんな低空で低速じゃあ再起動もできないし。ああ、ていうかなんであたしは少佐に会わせて緩降下したんだろう」

思わずノリでやってしまったことを、シャーロットは今後悔した。

「……あーはっはっはっ。大丈夫だ。こうすればいい」

「ちよ、ちよつと少佐！」

坂本は着水体勢にはいると、ヒョイとシャーロットを腕で抱え上げた。

「お、重くない？」

「ふむ、まあシャーリーの体格からしたらこんなもんだろう」

ズイツと胸元に引き寄せられると、シャーロットは思わず赤面した。

黒髪が細く風に揺られている。もしかしたら扶桑人形なんじゃないか、つてくらいに整った顔が目前に迫った。

不思議そうに顔を覗き込んで切る坂本に、シャーロットは堪らず目をそらす。

……これだから、扶桑の魔女は。

「さあかもと少佐あッ！」

いつの間に出てきていたのか、甲板で土方がこれ見よがしに大きく手を振っている。

「お疲れ様ですッ！ シャーロット少佐もよくぞ踏みとどまられました」

クレーンでつられてウィッチの二人が甲板に上がると、まずは土方から声をかけられた。

シャーロットはいつそう顔を赤らめ、半ば暴れるようにして坂本の腕の中から抜けた。

そして次に聞こえてきたのは苦々しげな老人の声。

「……シャーロット・E・イエーガー少佐。リベリオン陸軍からの要請により、拘束する」

「はいはい、分かってますよー。……じゃ、じゃあ坂本少佐。また後で」

率いられ手ながらも手をヒラヒラさせるシャーロット。いつもより早足で彼女は艦橋へと消えていった。

土方は嬉しそうな顔を一転、おずおずと切り出した。

「時に少佐、またですか」

「ん、どういう意味だ」

「いえ、説得の度に魔女を口説くなんて、さすがですね」

「……まーたその言いがかりか。一体誰が流布したんだか。未だにミーナからもその件の手紙が来るぞ。噂とは怖いモノだな」

坂本は腕を組んで、心からやっかいそうに唸った。

怖いのは貴女の方ですよ、と土方は口にするほど無駄なことをする男ではなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1530p/>

サカモト症候群

2010年11月26日16時55分発行